台大日本語文研究第 46 期
2023 年 12 月，頁 51-72
2023-09-30 收稿，2023-11-20 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202312_(46).0003

陽明文庫本《源氏物語》之書寫方針與異文的成因
—以夕顏卷中女性角色之待遇表現為中心—

林欣慧*

摘要

由於書寫時代可追溯至鎌倉時代，其文本內又包含與古註釋《源氏釋》相同的字句，《源氏物語》的陽明文庫本一直被學界視為留存了此作品古老形態的重要寫本。故而研究此寫本，釐清其於諸多寫本中之定位以及此寫本本身的特色，應具備學術價值，亦有助於掌握《源氏物語》這部作品的傳承脈絡。

本論文以夕顏卷為考察對象，探討陽明文庫本的書寫者解讀此作品時之思考與呈現方式。在此寫本的先行研究中，有學者指出其特徵之一為，女性角色與天皇相戀時，其待遇表現有所提升。經調查夕顏卷內所有與青表紙本及河內本相異之處後，可確認該卷內與源氏相戀的女性角色之相關描寫中，亦存在同樣情形。

不僅如此，透過對夕顏卷的調查，筆者亦發掘了新的課題。首先，雖可見到相當於本卷女主角的夕顏待遇表現提升之處，但亦可見到不利於夕顏形象的字句，其因在於書寫者整體仍採客觀敘事。此外，在帚木卷中可見到提升女性角色空蟬敬語等級的異文，夕顏卷中卻無，可知陽明文庫本在書寫上雖有一致方針，但可能會視人物在該卷的定位而變動。最後，與具爭議的人物六條御息所相關的異文多為顧慮其立場的友好內容。這是書寫者本身獨特的詮釋，還是當時對此人物亦有此種態度、看法，有必要持續調查，以釐清陽明文庫本的生成背景。

關鍵詞：別本、空蟬、六條御息所、青表紙本、河內本

臺大學術期刊資料庫

* 國立台灣大學日本語文學系副教授

The Writing Guidelines of the Yōmei Bunko Text of "The Tale of Genji" and the Causes of Different Texts: Focusing on the Treatment of Women in Yūgao Volume

Lin,Hsin-Hui*

Abstract

Because of the writing period and similarity to " Genjisyaku", the Yōmei Bunko text of "*The Tale of Genji*" has always been regarded as an important manuscript. Therefore, it is valuable to study this manuscript and clarify the position among other manuscripts.

In order to explore the writing guidelines of this manuscript, this paper takes the Yūgao volume as the object of investigation. In the preliminary research, it was pointed out that it has the characteristics of improving the treatment of the woman who fell in love with emperor. It can be confirmed in the women fell in love with Genji in this volume.

Furthermore, based on the objective narrative policy, we can also see words not conducive to Yūgao 's image. In addition, Utusemi's honorifics are not promoted. Finally, the similarities and differences related to the controversial figure Rokujounomiyasundokoro are mostly friendly content that concerns her stance. Is this the writer's own unique idea, or the general view at the time. It is necessary to continue investigation in order to clarify the background of the Yōmei Bunko text.

Key words: Beppon, Utusemi, Rokujyounomiyasundokoro, Aobyousibon, Kawatibon

臺大學術期刊資料庫

* Associate Professor, Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

陽明文庫本『源氏物語』の書写方針と異同の成因
—夕顔巻における女性人物の待遇表現を中心に—

林欣慧*

要旨

『源氏物語』の諸本の中でも鎌倉時代という書写時期の古さ、および『源氏釈』所引本文と同じ語句を有することから、陽明文庫本は古態を保存した貴重な写本として認識されてきた。そのため、当写本について研究し、その位置づけと特質を究明することに価値があり、『源氏物語』の伝承経過を把握することに役立つと考えられる。

陽明文庫本の書写姿勢の一致性を検証するにあたり夕顔巻を対象とした。桐壺巻・帚木巻に関する先行研究の考察から陽明文庫本にはその巻のヒロインに当たる女性の待遇表現を上げる現象が見られることが分かった。夕顔巻の青表紙本系と河内本系と異なる表現をできるかぎり網羅したところ、上述の二巻と同じ傾向が確認できた。

のみならず、夕顔巻に対する考察によって新たな課題も手に入れた。まず、夕顔への敬意程度を上げる箇所が見られる一方、客観的に事実を述べる姿勢から夕顔の印象を損ねる表現も見られ、女君であろうと全面的に美化されるとは限らない。また、帚木巻では空蝉の待遇向上が確認できたにも関わらず夕顔巻ではそれが見られないことから書写姿勢に一致性が認められるとはいえ、人物の巻ごとの位置づけによって変動する可能性があることも分かった。更に、六条御息所に比較的に寛容とも言える異同があることから陽明文庫本の書写者の姿勢の根拠を突き止めていく必要があることを指摘した。

キーワード：別本、空蝉、六条御息所、青表紙本、河内本

臺大學術期刊資料庫

* 国立台湾大学日本語日本文学科副教授

陽明文庫本『源氏物語』の書写方針と異同の成因
—夕顔巻における女性人物の待遇表現を中心に—

林欣慧

一、はじめに

陽明文庫本『源氏物語』は五十四帖からなり、『源氏釈』所引の本文と共通する語句を有する[1]ことから古態を保存した貴重な写本として認知されている。

『陽明叢書国書篇』の書誌調査によれば、同写本は表表紙と裏表紙の文様に基づき、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬の九種類に分類できる。中でも、甲類表紙を有する三十五帖から表紙補修・変更の疑いのある絵合・若紫・橘姫・東屋・浮舟・幻・手習の七帖[2]を排除した後の二十八帖は同写本の基幹として位置づけられる。

その二十八帖の中に桐壺・帚木・空蝉・夕顔の四巻の名前が引っ切り無しに連なることが注目に値する。特にいわゆる帚木三帖は登場人物や構想において連続性が高いため、首巻の桐壺巻と合わせて、この四巻の本文を調査することによって巻ごとの特色究明が期待できるのみならず、陽明文庫本の基幹をなす諸帖に書写姿勢の一致性が存在するか否かを判断する材料も得られよう。

『源氏物語』の首巻という位置づけによるものか、桐壺巻に関する先行研究は多数挙げられる[3]。また、それに続く帚木巻を考察対象とした論文も出版されている[4]。本論文は陽明文庫本の書写姿勢の一

---

1 伊井春樹（1988）「源氏釈の形態」紫式部学会編『源氏物語と和歌　研究と資料—古代文学論叢第四輯—』再版、東京、武蔵野書院。「源氏釈の依拠した本文が、陽明文庫本と同系統の本文であるのは言うまでもないこと」とある。p.301

2 財団法人陽明文庫編（1979）『陽明叢書国書篇　第十六輯　源氏物語　一　翻刻・解説』京都、思文閣。pp.89-93 頁。

3 書誌情報の紹介と翻刻本文の提供を主な目的とする『陽明叢書国書篇』の他に伊井春樹（2002）「陽明文庫本『源氏物語』の方法」（同氏『源氏物語論とその研究世界』所収）や中村一夫（2008）「陽明文庫本源氏物語の待遇表現—別本とはどういう本文か—」（伊井春樹監修・伊藤鉄也編『講座源氏物語研究第七巻　源氏物語の本文』所収）などが挙げられる。

4 林欣慧（2022）「陽明文庫本『源氏物語』帚木巻における源氏の人物像—書写

致性を解明する一環として、帚木巻の系譜を継ぐ夕顔巻の本文を考察対象とする。

二、先行研究

陽明文庫本『源氏物語』夕顔巻の本文性格をメインテーマとする論考自体はさほど多く見当たらないが、『源氏物語』の本文に関する総合的研究を行う上で、同本の夕顔巻に言及したものであれば、いくつか挙げられる。以下その内容を確認していきたい。

本文の採択基準に一致性を欠く問題が発覚したことから学界からその言説を質疑される場合もあるが、『源氏物語』の本文研究において『源氏物語大成』[5]（以下『大成』）は常に濫觴たる存在である。青表紙本系・河内本系・別本群という分類を提唱した同書は陽明文庫本の夕顔巻を別本的特徴を有する校訂用本文として校異篇で採用しており、同本の位置づけを示唆する役割を果している。

その後、『源氏物語』を収録対象とした『陽明叢書国書篇　第十六輯』は、陽明文庫本『源氏物語』の翻刻テキストを提供したのみならず、同写本について内外ともにつぶさな調査を行い、巻ごとの料紙・行ごとの文字数[6]などの書誌情報を詳細に記録した。その上、青表紙系と河内本系と比較することによって当該写本の初歩的な書写態度をも明らかにしている。

夕顔巻についても「概して脱字・誤字も訂していて、おとなしい書写態度」[7]、「本文は、青表紙本・河内本のいずれとも違い、三本は相互に等距離ぐらいにある。別本とすべき」[8]、陽明文庫本には「客観的事態の説明」の姿勢を取る箇所がいくつか見られる[9]などの知見

者の立場とその影響―」『台湾日本語文学報』52、台北、台湾日本語文学会、pp.203-229

5 池田亀鑑編（1979）『源氏物語大成　巻一　校異篇』七版、東京、中央公論社。以下同書に言及した場合は『大成』と略す。

6 同注２書。pp.80-84。

7 同注２書。p.113

8 同注２書。p.113

9 同注２書。例えば源氏が尼君を見舞う場面について「みて」で子供たちの反応を描く陽明文庫本の本文を「第三者的口振り」とする。また、頭中将が夕顔のところを訪れない時があるという状況を説明する際に、陽明文庫本に

青山学院大学学術期刊資料庫

が示されている。

『陽明叢書国書篇　第十六輯』による堅実な研究成果を踏まえ、諸本における当該写本の位置づけに着目した論考も次第に現れてきた。管見の限り、五島和代（1985）「河内本源氏物語と陽明文庫本」（『北九州大学文学部紀要』35）と豊島秀範（2018）「河内本の本文の特徴―「夕顔」「若紫」を中心に―」（『國學院大學大学院紀要』49）の二本が確認できる。

前者は陽明文庫本諸巻の性格について、

> 尾州家本と最も高い一致率を見せるのは、空蝉巻と末摘花巻の二巻である…この二巻についで、河内本と近い異文を有するのは浮舟・葵・蜻蛉・藤裏葉・手習・桐壺・夕顔・宿木・朝顔等々の諸巻であるが、これらは、陽明文庫本よりも他の別本との一致率が高かったり、陽明文庫との一致率が五割に満たない場合であったりする…[10]

と指摘した上で、空蝉・末摘花「両巻の陽明文庫本と河内本本文を検討する」と論文の趣旨を説明した。上述の内容によれば、陽明文庫本の夕顔巻は河内本系の尾州家本と類似する箇所を見せるが一致性はさほど高くないものとして判定されている。

また、後者はいわゆる短編系と長編系の代表的な巻を同時に視野に入れるという意図から夕顔巻と若紫巻を考察対象としたことを断った上で[11]、「おぼす」「おもほす」の用例を中心に、陽明文庫本を含む別本群・河内本系・青表紙本系の本文親疎関係について検証した。

その結果、独自の異文が確認できる一方、陽明文庫本の夕顔巻には青表紙本系と河内本系の本文を併せ持つ箇所も少なからず見られるということが判明し、豊島氏は「両系統の本文を把握できる状況

「たへまあ覧おりに」とあり、青表紙本系・河内本系に「とだえをかむ」とあるこの異同の状況についても前者を「客観的状況を述べる形」、後者を「頭中将自身の意志による状況をいう形」と評す。p.115-116。

10 五島和代（1985）「河内本源氏物語と陽明文庫本」『北九州大学文学部紀要』35、北九州、北九州大学文学部。p.1

11 豊島秀範（2018）「河内本の本文の特徴―「夕顔」「若紫」を中心に―」『國學院大學大学院紀要』49、東京、國學院大學大学院。p.17

にあった者が作り得た本文が陽明文庫本であった」[12]と結論づけた。

更に、書誌調査や親疎関係に留まらず、異文の効果に着目した論著も現れた。例えば山内啓介（1984）「「かのまされる人」を解釈する―陽明叢書『源氏物語』帚木三帖から―」（『国文学論叢』29）は陽明文庫本夕顔巻の異文について以下のようなことを指摘した。

まず、同本当該巻の末尾にある「ものいひさがなさ」という文言と「とぞ」で巻を閉じるという手法が大島本帚木巻のそれぞれ冒頭部と末尾に見られることに着目し、本文の伝承過程における両系統の関わりを示唆した。次に陽明文庫本における他の異文を数箇所挙げ、同本帚木巻の「いぶかし」という表現が同本自身ひいては他本の夕顔巻に流用されていることを主張した。最後に、前後の文脈をもとに陽明文庫本における「かのまされる人」という表現は軒端荻ではなく空蝉を指すためのものとし、当該箇所を解釈する上での新たな可能性を示した。

同じく陽明文庫本の夕顔巻における異文に言及した著作として、他にも加藤昌嘉の『揺れ動く『源氏物語』』[13]が挙げられる。六条御息所と一夜を過ごした後、その邸宅を出る際に女房中将と次のような和歌のやりとりを行った。本文は『大成』に拠り、改行・濁点・句読点・傍線は私に付した。

咲花にうつるてふなはつゝめどもおらですぎうきけさのあさがほ

いかゞすべきとてゝをとらへたまへれば、いとなれて、とく

あさぎりのはれまもまたぬけしきにて花に心をとめぬとぞみる

とおほやけごとにぞきこえなす（大島本一一〇07-10）

源氏と六条御息所の冷えつつある関係性および「公事にぞ聞こえなす」という言い回しから、中将の返歌における「心をとめぬとぞ見る」の一節は六条に対する源氏の心ここに在らずな態度への皮肉

[12] 同注 11 論文。p.25。
[13] 加藤昌嘉（2011）『揺れ動く『源氏物語』』初版、東京、勉誠出版。pp.54-55

臺大學術期刊資料庫

で、その「ぬ」は打消助動詞であるという解釈がなされてきた。

しかし、このような通解に対し、時枝誠記は引用の「と」の前には終止形が来るべきという文法上の規則を喚起したのみならず、陽明文庫本の当該箇所には「とめぬる」[14]とあることも根拠として取り上げ、ここの「ぬ」は完了の意で解釈すべきと指摘している[15]。

更に、同じく「ぬ」の完了説を提唱する論著として、近年は工藤重矩（2007）「和歌は正しく解釈されているか」[16]が挙げられる。

加藤は以上の論説を要約した上で、陽明文庫本の異文を古注釈として利用する時枝誠記の手法は「範とすべきところ」[17]と評価した。

以上のように、陽明文庫本夕顔巻に触れた論考はいくつか見られるが、『源氏物語』の諸本（特に河内本と）の親疎関係を調査する意図から異文を物差し扱いするものや単一の場面における個別の異文の解釈に注力したものが殆どである。

しかし、陽明文庫本の先行研究から分かるように、同本には書写者による登場人物の解釈から発生する異文の積み重なりが見られる。そのため、単に局部に留まらず、巻全体を見渡した上でそれらの異文の傾向を分析し、書写者の姿勢を明らかにする必要があると考えられる。

方法としては、まず『源氏物語別本集成』[18]（以下『別本集成』）・『大成』の校異表を利用し、陽明文庫本の青表紙本系と河内本系と異なる箇所を集める。次に各異文の成因を判断した上で誤写以外のものの意図と効果を推敲し、同じ傾向を有するものを分類した。

対校表を作成するにあたり、テキストとして、陽明文庫本の本文

---

14 同注 2 書。翻刻に「花に心をとめぬるとそみる」（p.58 の 7 行目）とある。
15 時枝誠記（1967）「源氏物語の文章と和歌」『言語生活論』初版、東京、岩波書店、pp.95-105。「「とめぬ」は、助詞「と」の接続関係を考へれば、完了の意味でなければならない」（p.105）とした上で、「陽明家本に「とめぬると」とあるところから見ても、これを完了に解するのが正しい」（p.105）と補足した。
16 伊井春樹監修・加藤昌嘉編（2007）『講座源氏物語研究　第八巻　源氏物語のことばと表現』東京、おうふう所収。pp.103-125。
17 同注 13 書。p55。
18 伊井春樹・伊藤鉄也・小林茂美編（1989）『源氏物語別本集成　第一巻　桐壺―夕顔』初版、東京、桜楓社。以下『別本集成』と略す。

臺大圖書館期刊資料庫

は『別本集成』、青表紙本系・河内本系の代表に当たる大島本・尾州家本の本文はそれぞれ『大成』第一巻・『尾州家河内本源氏物語　第一巻』[19]に拠る。

本論文所引本文の末尾には、陽明文庫本の場合は『別本集成』の文節番号を、大島本・尾州家本の場合は漢字で頁数を、算用数字で行数を示す。また、紙幅を考え、尾州家本は大島本と異なる箇所のみその上に引用する。濁点・句読点・鍵括弧・傍線は私に付した。

三、陽明文庫本源氏物語における夕顔の人物像

先行研究および筆者自身の論文から陽明文庫本の桐壺巻と帚木巻にはともにその巻の女君に当たる人物への感情移入による異文、特に待遇表現の変化が認められることが分かった。陽明文庫本夕顔巻の異文を全体的に調査したところ、当該巻にもこのような傾向を窺わせる箇所が見られることを確認した。

（一）敬意の上昇

■　文例 1

【陽明文庫本】

「よの人にもにず、物つゞみをし給て、人にものおもふけしきみえんをもはづかしき物にし給ひて、つれなうもてなし**御覧ぜられ給**めりし」とかたりいづる…（044760-044779）

夕顔が亡くなった後で滅多に心内を見せない女主人の稟性について右近が源氏に弁駁する一節である。右近が夕顔にひたすら尊敬表現を使用するこの陽明文庫本の本文に対し、大島本と尾州家本には

「つれなくのみもてなして**御らむ（ん）ぜられたてまつり給（ふな）**・・めりし」

（大一三九 07-08）（尾八二 03）とあり、大島本は源氏を意識した二方向敬語を使用していることが分かる。

この例に関しては河内本系の諸本にも「たてまつり」がないため、

[19] 秋山虔・池田利夫編（1977）『尾州家河内本源氏物語　第一巻』東京、武蔵野書院。

臺大學術期刊資料庫

陽明文庫本夕顔巻独自の特色を物語る例として採用できないが、同じく二方向敬語を持たない箇所は他にまだいくつも見られる。

■ 文例 2

【陽明文庫本】

「まことのあまのこなりともさばかりの思ひをしらでへだて給しかば、つらくなんありし」△の給はすれば、「などでかふかうかくし給事は侍らん…」（044556-044572）

文例 1 に先立つもので、同じく右近による弁駁の一節である。距離を置く夕顔の態度を恨めしく感じる源氏の非難に対し、夕顔には隠し隔てる心積もりはないと答える。青表紙本系と河内本系を確認したところ、この右近の返答に当たる部分は「などでかふかくかくしきこえ給（たまふ事）・・ことは侍（はべ）・らん」（大一三七 11）（尾八一 02）とあり、いずれも陽明文庫本とは異なり、「給ふ」の前に「きこえ」をつけて源氏に配慮した二方向敬語を使用している。

源氏に対する謙譲表現を欠く箇所は他にも見られる。

■ 文例 3

【陽明文庫本】

「そこのことしよりふたがるかたに侍りければたがうとてあやしき所にものし給ひしを、みあらはされぬる事とおぼしなげく…」（0044747-044759）

方違えのために五条あたりに移住したところを源氏に見られてしまったことについて夕顔が嘆かわしく思っていた、と右近が語る。当該箇所は青表紙本系と河内本系においていずれも「みあらはされ（見）たてまつりぬることゝおぼしなげく」（大一三九 05-06）（尾八二 01-02）とあり、源氏への謙譲表現に当たる「たてまつり」がある[20]。

[20] 因みに、麦生本と阿里莫本には「みあらはされ（見）給ぬる」（044757）とある。送り仮名がないため、確定できないが、この「給」は恐らく「たまひ」と読み

臺大學術期刊資料庫

以上から、夕顔の動作に言及した際に他本がいずれも源氏に配慮した謙譲表現を有するのに対し、陽明文庫本にはそれがないことが明白である。但し、以上の3例はあくまで夕顔の女房である右近の立場からの発言であるため、僕従の主人に対する敬意を高める意図による結果という可能性もある。

それでは、次の例はどうだろう。

■　文例4

【陽明文庫本】

「いづれかきつねならんな。たゞはかられ給へかし」となつかしげにの給を女もいみじくなびきて、さもありぬべく**おぼいたり**。（041745-041757）

狐に謀られたつもりで自分に従いなさいという源氏の戯れごとに対する夕顔の従順な反応を描いた一節である。ここで注目したいのは文末の動詞である。

深い仲になったにもかかわらず、なお素性を打ち明けようとしない夕顔に源氏が恨み言を言う一節として、青表紙本系と河内本系に「へだてのこしたまへる（給ふ）」（大一二二02-03）（尾七一13）とあるのに対し、陽明文庫本には「へだて**のこひ給**へる」（042536-042547）とある。このことから、陽明文庫本において「し」が音便によって「い」へと発音が変化する場合があることが推定できる。これを踏まえ、文例4における夕顔の思惟動詞も「おぼしたり」として認知できる。

これ対し、青表紙本系と河内本系には「さもありぬべく**思（うおもひ）・・たり**」（大一一五09）（尾六七14）とあるため、陽明文庫本において夕顔を主語とする際に他本より高い敬意表現が使用されている箇所が

右近による夕顔への尊敬表現と考えられる。源氏に対する謙譲表現を廃棄するに留まらず、更に進んで夕顔に尊敬表現をつける麦生本系統の本文は、陽明文庫本の解釈の系譜を引いた産物と推察される。

書陵部紀要刊資料庫

あることが分かる。

文例 4 と類似した異同は他にも見られる。

■ 文例 5

【陽明文庫本】

いとあはれげなるおのがじゝのいとなみにおきいつゝ、そゝめきすだくもほどなきを、女はいとはづかしと**おぼもいたり**。（041845-041856）

五条あたりの邸で夜を過ごした際に隣家の声が聞こえることを夕顔が情けなく思う様子を源氏の目線から描く一節である。『別本集成』において当該箇所には校訂の記号が付けられており、「おもいたり」はあくまでミセケチを施した後の結果で原初の形は「おぼいたり」であったということが示されている[21]。夕顔の身分を気にした読者の行いか。一方、青表紙本系と河内本系の本文には「女（をんなは）・・・いとはづかしく（と）**おもひたり**」（大一一六 06）（尾六八 05）とある。

以上の比較を通して、他本に比べると、陽明文庫本において当巻の女君に当たる夕顔に使用される敬語の敬意程度が高いことが分かる。このような敬語の使い方は桐壺巻と帚木巻のそれと同じもので、陽明文庫本はある程度一致した姿勢によって書写されていたと考えられる。

但し、同本における夕顔に関する異同を確認したところ、待遇表現が上昇する箇所が少なからず見られる一方、源氏の目線からなされる説明には時に、夕顔との距離感を窺わせるものや夕顔の造形に影響するものも見られる。

（二）源氏から見る夕顔

■ 文例 6

[21] 『別本集成』当該箇所の校異注記には「おほいたり/ほ＄も」(p.511) とある。同書の〈校異上の注記〉と〈補足事項〉には「〈ミセケチ〉による修正は「／＄」で明示して…消された文字は「＄」の記号の前に書き、修正された文字はその後に書いた」(p.17) とある。

臺大圖書館期刊資料庫

【陽明文庫本】

心ちばみたるかたをすこしそへたらばしと**みえながら**（042007-042011）

源氏が夕顔の物足りない点について述べる一節で、大島本には「心ばみたるかたをすこしそへたらばと**みたまひながら**」（大一一七 10-11）と、尾州家本には「すこしこゝちばめるけをつけばやと**見給ながら**」（尾六八 18）とあり、いずれも源氏自身の主観的判断を表す言葉を使用しているのに対し、陽明文庫本の「みえ」という自発動詞からは距離を取って客観的に評価を下す姿勢が読み取れる[22]。先行研究を紹介する部分で言及した『陽明叢書国書篇』による「客観的説明」という指摘と通じるものである。

また、夕顔が亡くなった後執拗にその亡骸に会わせるよう惟光にせがむ源氏が願いを叶えた後、夕顔の様態について次のような評価をする。

■　文例 7

【陽明文庫本】

おそろしうもおぼえ給はず、いとらうたげなるさまして**まだいたうかはる所もなし**（044089-044099）

「まだ**いさゝかかはりたるところ・なし**」（大一三三 13-14）（尾七八 14）とあり、夕顔の容貌の変化を完全に否定する言い方を通して源氏の愛情深さを描き出す青表紙本系と河内本系とは異なり、陽明文庫本傍線部の描写は亡骸にさすがに幾分変化が生じたという現実の生々しさを匂わせている。同じく客観的な視点から評価を行う意図による結果と考えられるが、それと同時に常に浮世離れした女性として描かれる夕顔の幻想性を損なうことにもなった。

更に、夕顔との出会いに関する描写に至ってはその人物像に影響

[22] 但し、『大成』の校異欄で確認したところ、当該箇所に関しては青表紙本系とされる御物本・横山本に「みへ給ながら」とあるため、陽明文庫本独自の特色を表す異同としては認められない。

書陵部紀要・古典籍デジタル資料庫

を及ぼす変化が見られる。

■　文例 8

【陽明文庫本】

こゝろあてにそれかとぞみるしらつゆのひかりそへたるゆふがほのはな

そこはかとなくかきまぎらはしたるてもあてはかに**ゆへづけたれば**、いと思ひのほかにおかしう…（040419-040435）

青表紙本系と河内本系に「あてはかに**ゆへづき**たれば」（大一〇四09）（尾六一 05）とあり、結果を示す機能を持つ自動詞の「ゆへづき」で夕顔の和歌を形容するのに対し、陽明文庫本には他動詞の「ゆへづけ」が使用されている。この書き方によって夕顔の意図的な営為を読者に印象づけることとなった。

同じような問題を招く異同は心内文のみならず、源氏の発言にも見られる。

■　文例 9

【陽明文庫本】

「ゆふつゆにひもとくはなをたまほこの**たよりにみせし**えにこそありけれ

つゆのひかりやいかに」との給へば…（042386-042397）

見知らぬ白い花に好奇心をそそられた源氏に折よく夕顔の花が贈呈された、という出会いのきっかけを夕顔を相手に振り返る源氏の発言である。青表紙本系と河内本系に「玉（たま）・ほこのたよりに**見（み）えし**」（大一二〇14）（尾七〇18）とあり、「縁」に事寄せる源氏の言い回しに相応しい「みえ」という自発動詞が使用されているのに対し、陽明文庫本には「みせ」とあり、二人の出会いは夕顔側の意図的な行為による結果と解釈される。その結果、ひたすら儚げで純粋潔白というわけではなく、寧ろアグレッシブでいささか計算もできる人物として認識されることになった。

当巻の女君とはいえ、陽明文庫本の夕顔に関する描写は必ずしも

臺大學術期刊資料庫

全面的に他本より美化されるとは限らないのである。これをあくまで物語の状況を俯瞰的に観察した上で常に客観的な説明を施そうという書写者の方針による結果として理解できるが、女君の造形に影響を及ぼす箇所にも手加減がないことが気にかかるため、他の女性の描かれ方も確認して当該巻の書写者の姿勢を更に把握したい。

四、「脇役」の女性に関する描写

ここでは帚木三帖を通して登場する女性がいることを想起されたい。空蝉である。帚木巻で源氏の心を引く役割を担った彼女は夕顔巻においてどのように描写されているのだろうか。

（一）空蝉

■　文例 10

【陽明文庫本】

つれなき心は**にくけれど**人のためはあはれとおぼしなさる。（040925-040931）

源氏の空蝉に対する感情を描く一節である。青表紙本系と河内本系の当該箇所に「つれなき心（こゝろ）・・は**ねたけれど**」（大一〇八 09）（尾六三 12-13）とあり、「ねたし」程度で済ませるのに対し、陽明文庫本には「にくし」とあり、源氏の激しい怒りが読み取れる。

無論、同本帚木巻における源氏の空蝉に対する感情描写にも「まことにつらく」のような強烈なものが多いことから、同じ書写姿勢による結果と理解することも可能である。

但し、次のような例も視野に入れることによって、同巻における空蝉の位置づけを認識したい。

■　文例 11

【陽明文庫本】

さるべきおり〈踊り字〉の御いらへなどなつかしうきこゑつゝ、なげのふでづかい、**はしりかくことのはもあやしう**めとまるふし〈踊り字〉くわへなどして…（040970-040988）

臺大學術期刊資料庫

人妻の立場から空蝉は源氏に靡くことを堅く拒否したが、後日も時折源氏と文を交わす間柄を維持している状況を説明する一節である。青表紙本系と河内本系にはともに「なげのふでづかひにつけたる事（こと）・のは（も）・**あやしくらうたげに**めとまるべき××ふし（ぶし）・・くは（わ）へなどして」（大一〇九 02-03）（尾六三 17-18）とあり、空蝉の不屈を不満に思うも、寄せられたその言の葉には不思議に愛らしく感じられるところがあり、やはり目を引き付けられる源氏の複雑な心境を醸し出している。

これに対し、陽明文庫本の当該箇所には「あやし」という、文脈次第では負的な表現としても捉えられる言葉しか残らないだけでなく、他本にない「はしりかく」という言葉を有することによって寧ろ空蝉の気持ちを軽いもののように感じさせ、全体的には空蝉の美質に関する描写が無に等しい文章となった。

また、帚木巻とは異なり、陽明文庫本の夕顔巻における空蝉対象の敬語に注意を払ったところ、別段他本より敬意程度が高まる箇所が見当たらないため、人物の待遇表現が巻ごとの位置づけによって変動する可能性があると考えられる。

今まで夕顔・空蝉に関わる異同について見てきたが、当該巻に登場する主な女性人物は他にまだ一人いる。

（二）六条御息所

■　文例 12

【陽明文庫本】

六条にもとけがたかりし御けしきを**おもむけきこゑ給へし**後、ひき返しなのめならんはいとをしかるべし…（041025-041034）

身分の高貴な女性たちとの行き詰った関係に倦怠感を覚える源氏の心内文で、矜持深い六条を振り向かせておきながら今更ぞんざいに扱うわけにはいかないという考えを示す一節である。

臺大學術期刊資料庫

青表紙本系と河内本系にはともに「御けしき（氣）を**おもむけきこえ給**

てのち」（大一〇九 08）（尾六四 04）とあり、普通に「きこえ給ひてのち」と読み六条と源氏への二方向敬語として理解できるのに対し、「きこゑ」の後に更に立て続けに連用形が「給へ」である下二段謙譲動詞を使用することによって源氏を六条御息所より下の立場に置き、後者に対する敬意を高めている陽明文庫本の姿勢は注意に値する。無論、中古文法に疎い後人が尊敬語と謙譲語を間違えたことによる異同という可能性もあるが、源氏と六条のやりとりにおける敬語の変化は他にも見られる。

■　文例 13

【陽明文庫本】

きりのいとふかきあした、**いたうそゝのかされて**ねぶたげなるけしきにうちなげきつゝいで給を…（041065-041075）

六条御息所と共に一夜を過ごした後源氏がその邸宅を離れる際の一節である。まだ眠たげな源氏を六条御息所が何度も催促する描写において、他本が「いたう（く）そゝのかされ給（たまひ）・・て」（大一〇九 12-13）（尾六四 08）と、六条御息所に催促される源氏に尊敬表現をつけるのに対し、陽明文庫本にはそれがない。

接続助詞の前にある尊敬表現を省き、文末に集中する方針が陽明文庫本に存在する可能性も考えられるが、次の例と対照すると、そのように判断しがたいことが分かる。

■　文例 14

【陽明文庫本】

さるべき人をそへてうかゞはせ、あか月の道をたづねてありかみんとたづぬれど、そこはかとなく**まどはし給**つゝ…（041525-041537）

夕顔側が遣わした者を、源氏はさりげなく惑わせて正体を突き止められることを回避した。他本には「そこはかとなく**まどはしつゝ**」（大一一三 10）（尾六六 12）とあるのみのに対し、陽明文庫本は文中にもかかわらず源氏の動作に尊敬の補助動詞を付けており、源氏

臺大藝術期刊資料庫

の相手に対する優位性を強調している。文例 13 と異なる方向性を見せるこの異同から推察するに、文例 14 は単に文中の敬語を節約するための結果ではなく、陽明文庫本の桐壺巻における帝と更衣のやりとりを描く際に帝の敬語を削除したように、六条御息所と睦言を交わす際の二人の関係性を意識し当該場面の源氏に敬語を使用することを控えたいがための本文である、という可能性がある。

また、他本に比べると、陽明文庫本夕顔巻における六条御息所に対する源氏の考え方にも異同が見られる。

■ 文例 15

【陽明文庫本】

かつはあやしの心や、六条わたりにもいかにおぼしなげき給らん。うらみられんにいとをしうことはりなれど、いとをしきすぢはまづ思ひいできこゑ給…（042556-042571）

夕顔に執心する自身のことを不可解に思うと同時に、六条御息所のことも気に掛かる源氏の心内を描く一節である。青表紙本系統と河内本系には「うらみられんにくるしうことはりなりと、いとをしきすぢはまづおもひ・・きこえ給・・」（大一二二 05-06）（尾七一 14-15）とある。前者は六条御息所の怨みによって自身が感じる苦しさを先に訴える自己本位な表現で、後者もあくまで六条御息所の反応に理解を示す程度に留まっている。

この他本における源氏の反応に対し、重複を批判される恐れもあるが、「いとをし」という表現を繰り返し使用する陽明文庫本の本文からはより六条御息所に対する源氏の心遣いが感じられる。

同じく源氏の考えにおける異同として、次の例を取り上げたい。

■ 文例 16

【陽明文庫本】

なに心もなきさしむかひをあはれとおぼすまゝに、あまり心ふかきうみる人くるしき御もてなしをすこしとりすてばやとお

臺大學術期刊資料庫

もひくらべ給ける。（042572-042587）

目の前にいるひたすら従順な夕顔を見て、源氏は思わず六条御息所と比較した上で、後者が「みる人」を息苦しく感じさせるという評価を下した。

青表紙本系と河内本系の諸本には「**みる人（見）もくるしき御（×）××××（もてなし）ありさまを（ぞ）・すこしとりすてばや**と思（おもひ）・・くらべ」（大一二二 06-07）（尾七一 16）とあり、いずれも「ありさま」という言葉があることに気づく。これに対して、陽明文庫本には「ありさま」がなく、源氏を息苦しく感じさせる原因はあくまでも「もてなし」である。

全体的な雰囲気を表すことも可能ではあるが、「ありさま」という言葉は容貌を指すものとして使用されることが多い。そのため、気品を強調されることが多くその美しさに関する説明が乏しいとはいえ、「ありさま」によって人が遠ざかるような女性として六条御息所を造形することを陽明文庫本の書写者が避けたと考えられる。

源氏が六条御息所の邸宅を出る際に女房中将の放った「花に心をとめぬ」という一言の解釈が分かれる問題に対し、「とめぬる」とある陽明文庫本の本文を利用し、完了説を支持する学者もいるということは先行研究を紹介する部分で既に説明した。

文例 12 から文例 16 までの当巻書写者の六条御息所に対する姿勢と合わせて考えると、その成因について更なる推察ができる。即ち、打消として当該箇所の「ぬ」を解釈された場合、六条御息所に対する源氏の感情を否定することになるため、それを避けたいがために、同じく引用の「と」の前に連体形を使うという文法に違反する問題を生じさせるにもかかわらず、「ぬる」と明記し、打ち消しではないことを強調する文章にした。このような考え方でこの中将歌における陽明文庫本の異文を理解することができるのではないか。

このように、異同の積み重なりをもとに、陽明文庫本の夕顔巻からは総じて六条御息所に比較的に寛容な姿勢が読み取れる。このよ

臺大學術期刊資料庫

うな姿勢は書写者個人の立場によるものか。或いは当時の解釈共同体における六条御息所に対する解釈から生じたものか。今後、鎌倉期の典籍を確認した上で明らかにする必要がある。

五、おわりに

陽明文庫本の書写姿勢にどれほどの一致性が存在しているかについて検証するために、それまでの巻に登場した人物を有し、帚木三帖に属する夕顔巻を考察対象とした。その結果、以下のことが判明した。

まず、首巻の桐壺巻とそれに続く帚木巻に見られる、巻の女君に当たる人物の待遇表現を引き上げる手法は夕顔巻にも確認できる。但し、夕顔に関する他の描写を確認したところ、先行研究においても指摘された、客観的な説明を行おうとする姿勢によるものか、たとえ当巻の女君であろうと、幾分造形を損なわれる表現を免れることができない。この問題は夕顔巻の本文を考察する本論文ではじめて確認できたものである。

また、帚木巻では源氏の執着心を掻き立てる役割を果した空蝉は、夕顔巻の中では待遇表現の上昇どころか、その美質を描写する文言を削除される箇所すら見られる。この結果から、次のことが考えられる。書写される当該巻における位置づけに応じて待遇表現が他の写本と異なる様相を呈する特徴こそ陽明文庫本に認められるが、その人物の物語における位置づけは必ずしも巻を跨って維持できるものとは限らないため、待遇表現もそれに伴って変動する可能性が高い。この変化の実態を把握するために、同一人物の異なる巻における描写を観察する必要がある。

更に、夕顔・空蝉の他に、源氏と情を交わしたもう一人の女性として六条御息所が当巻に存在していることも看過できない。夕顔巻における彼女に関わる陽明文庫本の異文を逼く確認したところ、他の諸本に比べ、概ね好意的なものとして理解できる。このことから、陽明文庫本は必ずしも女君以外の、男君の愛情を争う女性に敵意を

臺大藝術期刊資料庫

示す[23]とは限らないと考えられる。

以上から、陽明文庫本夕顔巻の特徴、ひいては同本の夕顔巻までの書写姿勢の一致性を概ね明らかにした。但し、ここから新たな課題が生じる。源氏の冷淡な態度や、葵の上の死をはじめとする様々な事件との関わりから、六条御息所は必ずしも読者から好意を持たれるとは限らない。にもかかわらず、陽明文庫本の夕顔巻において彼女に配慮した異同が数箇所見られることは注意に値する。

これは書写者自身の読みを反映した結果か。或いは当時の解釈共同体にこのような姿勢で六条御息所を扱う流派があったか。また、空蝉に関する描写姿勢の変化に鑑み、同本の他の巻における六条御息所はどのような造形されているかという問題についても確認せねばならない。陽明文庫本における鎌倉中期に書写された巻の群れの性格を明らかにし、同本の『源氏物語』伝承における位置づけを把握するために、今後引き続き調査していく必要がある。

【付記】本稿は国科会専題研究計画「《源氏物語》陽明文庫本系統之性質—以其桐壺巻至夕顔巻為考察對象—」（NSTC 111-2410-H-002-185-）による研究成果の一部である。

【参考文献】（年代順）

時枝誠記（1967）「源氏物語の文章と和歌」『言語生活論』『言語生活論』、東京、岩波書店、pp.95-105

秋山虔・池田利夫編（1977）『尾州家河内本源氏物語　第一巻』、東京、武蔵野書院

[23] 例えば、注3で紹介した中村氏の論文は、光源氏を東宮の座につける意図があると弘徽殿に危惧される桐壺帝の反応を描く際に、他本のように二方向待遇表現を使用するのではなく帝にのみ敬語を使用する点と、桐壺帝の弘徽殿に対する感情描写に「わづらはし」のみあり他本の「心苦し」を欠く点を指摘し、陽明文庫本の語り手が弘徽殿女御を重視していない姿勢を見せていると論証している。

池田亀鑑編（1979）『源氏物語大成　巻一　校異篇』、七版、東京、中央公論社

財団法人陽明文庫編（1979）『陽明叢書国書篇　第十六輯　源氏物語一　翻刻・解説』京都、思文閣

山内啓介（1984）「「かのまされる人」を解釈する―陽明叢書『源氏物語』帚木三帖から―」『國文学論叢』29、京都、龍谷大學國文學會、pp.7-18

五島和代（1985）「河内本源氏物語と陽明文庫本」『北九州大学文学部紀要』35、北九州、北九州大学文学部、pp.1-17

伊井春樹（1988）「源氏釈の形態」紫式部学会編『源氏物語と和歌　研究と資料―古代文学論叢第四輯―』再版、東京、武蔵野書院、pp.291－334

伊井春樹・伊藤鉄也・小林茂美編（1989）『源氏物語別本集成　第一巻　桐壺―夕顔』初版、東京、桜楓社

伊井春樹（2002）「陽明文庫本『源氏物語』の方法」『源氏物語論とその研究世界』初版、東京、風間書房、pp.581-605

工藤重矩（2007）「和歌は正しく解釈されているか」伊井春樹監修・加藤昌嘉編『講座源氏物語研究　第八巻　源氏物語のことばと表現』東京、おうふう、pp.103-125

中村一夫（2008）「陽明文庫本源氏物語の待遇表現―別本とはどういう本文か―」伊井春樹監修・伊藤鉄也編『講座源氏物語研究　第七巻　源氏物語の本文』東京、おうふう、pp98-123

加藤昌嘉（2011）『揺れ動く『源氏物語』』初版、東京、勉誠出版

豊島秀範（2018）「河内本の本文の特徴―「夕顔」「若紫」を中心に―」『國學院大學大学院紀要』49、東京、國學院大學大学院。pp.17-47

臺大學術期刊資料庫